

# 影を踏まれた女

岡本綺堂

青空文庫



Y君は語る。

先刻も十三夜のお話が出たが、わたしも十三夜に縁のある不思議な話を知っている。それは影を踏まれたということである。

影を踏むという子供遊びは今は流行はやらない。今どきの子供はそんな詰まらない遊びをしないのである。月のよい夜ならばいつでも好よさそうなものであるが、これは秋の夜にかぎられているようであった。秋の月があざやかに冴え渡って、地に敷く夜露が白く

光っている宵々に、町の子供たちは往来に出て、こんな唄を歌いはやしなから、地にうつるかれらの影を踏むのである。

——影や道陸神どうろくしん、十三夜のぼた餅——

ある者は自分の影を踏もうとして駈けまわるが、大抵は他人の影を踏もうとして追いまわすのである。相手は踏まれまいとして逃げまわりながら、隙すきをみて巧みに敵の影を踏もうとする。また横合いから飛び出して行って、どちらかの影を踏もうとするものもある。こうして三人五人、多いときには十人以上も入りみだれて、地に落つる各自の影を追うのである。もちろん、すべて転ぶのもある。下駄や草履の鼻緒を踏み切るのもある。この遊びはいつの頃から始まったのか知らないが、とにかく江戸時代を経て明治

の初年、わたし達の子どもの頃まで行なわれて、日清戦争の頃にはもう廃すたつてしまつたらしい。

子ども同士がたがいに影を踏み合っているのは別に子細もないが、それだけでは面白くないとみえて、往々にして通行人の影をふんで逃げることもある。迂闊うかつに大人の影を踏むと叱しかられるおそれがあるので、大抵は通りがかりの娘や子供の影をふんで、わつと囃はやし立てて逃げる。まことに他愛いたずらのない悪戯いたずらではあるが、たとい影にしても、自分の姿の映っているものを土足どそくで踏みじられるというのは余り愉快なものではない。それについてこんな話が伝えられている。

嘉永元年九月十二日の宵である。芝の柴井町、近江屋という糸

屋の娘おせきが神明前しんめいまえの親類をたずねて、五つ（午後八時）前に帰つて来た。あしたは十三夜で、今夜の月も明かるかつた。ことの秋の寒さは例年よりも身にしみて風邪引きが多いというので、おせきは仕立ておろしの綿入りようそでの両袖をかき合わせながら、北にむかつて足早にたどつて来ると、宇田川町の大通りに五、六人の男の子が駄げまわつて遊んでいた。影や道陸神の唄の声もきこえた。

そこを通りぬけて行きかかると、その子供の群れは一度にばらと駄げよつて来て、地に映っているおせきの黒い影を踏もうとした。はつと思つて避けよけようとしたが、もう間にあわない。いたずらの子供たちは前後左右から追つ取りまいて来て、逃げまわ

る娘の影を思うがままに踏んだ。かれらは十三夜のぼた餅を歌いはやしながらどっと笑つて立ち去つた。

相手が立ち去つても、おせきはまだ一生懸命に逃げた。かれは息を切つて、逃げて、逃げて、柴井町の自分の店さきまで駈けて来て、店の框かまちへ腰をおろしながら横さまに俯伏うつぶしてしまつた。店には父の弥助と小僧ふたりが居あわせたので、驚いてすぐにかれを介抱した。奥からは母のお由も女中のおかんでも駈け出して来て、水をのませて落ち着かせて、さて、その子細を問いただそうとしたが、おせきは胸の動悸どうきがなかなか静まらないらしく、しばらくは胸をかかえて店さきに俯伏していた。

おせきはことし十七の娘ざかりで、容貌きりようもよい方である。宵

とはいえ、月夜とはいえ、賑にぎやかな往来とはいっても、なにかの馬鹿者にからかわれたのであるうと親たちは想像したので、弥助は表へ出てみたが、そこらにはかれを追って来たらしい者の影もみえなかった。

「おまえは一体どうしたんだよ。」と、母のお由は待ちかねてまた訊いた。

「あたし踏まれたの。」と、おせきは声をふるわせながら言った。「誰に踏まれたの。」

「宇田川町を通ると、影や道陸神の子供達があたしの影を踏んで……。」

「なんだ。」と、弥助は張り合い抜けがしたように笑い出した。



「それがどうしたというのだ。そんなことを騒ぐ奴があるものか。影や道陸神なんぞ珍らしくもねえ。」

「ほんとうにそんな事を騒ぐにや及ばないじゃないか。あたしは何事が起こったのかと思つてびっくりしたよ。」と、母も安心と共に少しく不平らしく言つた。

「でも、自分の影を踏まれると、悪いことがある……。寿命が縮まると……。」と、おせきはさらに涙ぐんだ。

「そんな馬鹿なことがあるものかね。」

お由は一言のもとに言い消したが、実をいうとその頃の一部の人達のあいだには、自分の影を踏まれるとよくないという伝説がないでもなかつた。

しちしやく

七尺 去つて師の影を踏まずなどと支那で

もいう。たとい影にしても、人の形を踏むということとは遠慮しろ  
という意味から、かの伝説は生まれたいらしいのであるが、のちに  
は踏む人の遠慮よりも踏まれる人の恐れとなつて、影を踏まれる  
と運が悪くなるとか、寿命が縮むとか、はなはだしきは二年の内  
に死ぬなどという者がある。それほどに怖るべきものであるなら  
ば、どこの親たちも子どもの遊びを堅く禁止しそうなものである  
が、それほどにはやかましく言わなかつたのをみると、その伝説  
や迷信も一般的ではなかつたらしい。しかもそれを信じて、それ  
を恐れる人たちからみれば、それが一般的であるとなひとは問題  
ではなかつた。

「馬鹿を言わずに早く奥へ行け。」

「詰まらないことを氣におしでないよ。」

父には叱られ、母にはなだめられて、おせきはしよんぼりと奥へはいったが、胸いっぱい不安と恐怖とは決して納まらなかつた。近江屋の二階は六畳と三畳のふた間で、おせきはその三畳に寝ることになっていたが、今夜は幾たびも強い動悸に驚かされて眼をさました。幾つかの小さい黒い影が自分の胸や腹の上に跳おとつている夢をみた。

あくる日は十三夜で、近江屋でも例年の通りにすすきや栗を買つて月の前にそなえた。今夜の月も晴れていた。

「よいお月見でございます。」と、近所の人たちも言つた。

しかし、おせきはその月を見るのが何だか怖ろしいように思わ

れてならなかつた。月が怖ろしいのではない、その月のひかりに映し出される自分の影を見るのが怖ろしいのであつた。世間ではよい月だといつて、あるいは二階から仰ぎ、あるいは店さきから望み、あるいは往来へ出て眺めているなかで、かれ一人は奥に閉じこもつていた。

——影や道陸神、十三夜のぼた餅——

子供らの歌う声々が、おせきの弱い魂を執念ぶかくおびやかした。

その以来、おせきは夜あるきをしなかつた。ことに月の明かるい夜には、表へ出るのを恐れるようになった。どうしても夜あるきをしなければならぬような場合には、つとめて月のない暗い宵を選んで出ることになっていた。世間の娘たちとは反対のこの行動が父や母の注意をひいて、お前はまだそんな詰まらないことを気にしているのかと、両親からしばしば叱られた。しかもおせきの魂に深く食い入った一種の恐怖と不安とは、いつまでも消え失せなかつた。

そうしているうちに、不運のおせきは再び自分の影に驚かされるような事件に遭遇した。その年の師走の十四日、おせきの家で<sup>すすは</sup>煤掃きをしていると、神明前の親類の店から小僧が駈けて来て、

おばあさんが急病で倒れたと報しらせた。神明前の親類というのは、おせきの母の姉が縁付している家で、近江屋とは同商売であるばかりか、その次男の要次郎をゆくゆくはおせきの婿にするという内相談もある。その老母が倒れたと聞いてはそのままには済まされない。誰かがすぐに見舞に駆け付けなければならぬのであるが、あいにく今日は煤掃きの最中で父も母も手が離されないで、とりあえずおせきを出してやることにした。

たすき

襷たすきをはずして、髪をかきあげて、おせきがとつかわと店を出たのは、昼の八つ（午後二時）を少し過ぎた頃であった。行くさきは大野屋という店で、ここも今日は煤掃きである。その最中にことし七十五になるおばあさんが突然ぶつ倒れたのであるから、そ

の騒ぎはひと通りでなかつた。奥には四畳半の離屋はなれがあるので、急病人をそこへ運び込んで介抱していると、幸いに病人は正氣に戻つた。きようは取り分けて寒い日であるのに、達者にまかせて老人が早朝から若い者どもと一緒に立つて立ち働いた為に、こんな異変をひき起こしたのであるが、さのみ心配することはない。静かに寝かして置けば自然なほに癒ると、医者は言つた。それでまずひと安心したところへ、おせきが駈けつけたのである。

「それでもまあようござんしたわねえ。」

おせきも安心したが、折角ここまで来た以上、すぐに帰つてしまふわけにもいかないので、病人の枕もとまくらで看病の手伝いなどをして、師走のみじかい日はいつしか暮れてしまつて、

大野屋の店の煤掃きも片付いた。そばを食わされ、ゆう飯を食わされて、おせきは五つ少し前に、ここを出ることになった。

「お父さんやおつ母さんにもよろしく言つてください。病人も御覧の通りで、もう心配することはありませんから。」と、大野屋の伯母は言つた。

宵ではあるが、年の暮れで世間が物騒だといふので、伯母は次男の要次郎に言いつけて、おせきを送らせてやることにした。お取り込みのところをそれには及ばないと、おせきは一応辞退したのであるが、それでも間違いがあつてはならないと言つて、伯母は無理に要次郎を付けて出した。店を出るときに伯母は笑いながら声をかけた。



「要次郎。おせきちやんを送って行くのだから、影や道陸神を用  
心おしよ。」

「この寒いのに、誰も表に出ていやしませんよ。」と、要次郎も  
笑いながら答えた。

おせきが影を踏まれたのは、やはりここの家から帰る途中の出  
来事で、かれがそれを気に病んでいるらしいことは、母のお由か  
ら伯母にも話したので、大野屋一家の者もみな知っているのであ  
った。要次郎はことし十九の、色白の瘦形の男で、おせきとは似  
合いの夫婦といつてよい。その未来の夫婦がむつまじそうに肩を  
ならべて行くのを、伯母はほほえみながら見送った。

一応は辞退したものの、要次郎に送られて行くことはおせきも

実は嬉しかった。これも笑いながら表へ出ると、煤掃きを済ませて今夜は早く大戸をおろしている店もあった。家じゆうに灯をとぼして何かまだ笑いさざめいている店もあった。その家々の屋根の上には、雪が降ったかと思うように月のひかりが白く照りわたっていた。その月をあおいで、要次郎は夜の寒さが身にしみるように肩をすくめた。

「風はないが、なかなか寒い。」

「寒うござんすね。」

「おせきちちゃん、御覧よ。月がよく冴えている。」

要次郎に言われて、おせきも思わず振り仰ぐと、むこう側の屋根の物干の上に一輪の冬の月は、冷たい鏡のように冴えていた。

「いいお月さまねえ。」

とは言ったが、たちまちに一種の不安がおせきの胸に湧わいて来た。今夜は十二月十三日で、月のあることは判り切っているのであつたが、今までは何かごたごたしていたのと、要次郎と一緒にあるいているので、おせきはそれを忘れていたのである、明か  
るい月——それと反対におせきの心は暗くなつた。急に怖ろしい  
ものを見せられたように、おせきは慌てて顔をそむけて俯うつむ向くと、  
今度は地に映る二人の影がありありと見えた。

それと同時に、要次郎も思い出したように言った。

「おせきちゃんは月夜の晩には表へ出ないんだってね。」

おせきは黙っていると、要次郎は笑い出した。

「なぜそんな事を気にするんだらう。あの晩もわたしが一緒に送つて来ればよかつたつけ。」

「だって、なんだか気になるんですもの。」と、おせきは低い声で訴えるように言った。

「大丈夫だよ。」と、要次郎はまた笑つた。

「大丈夫でしょうか。」

二人はもう宇田川町の通りへ来ていた。要次郎の言つた通り、この極ごくげつ月の寒い夜に、影を踏んで騒ぎまわっているような子供のすがたは、一人も見いだされなかつた。昔から男おんなの影法師は憎いものに数えられているが、要次郎とおせきはその憎い影法師を土の上に落としながら、摺すり寄るように列ならんであるいてい

た。もちろん、ここらの大通りに往来は絶えなかったが、二つの憎い影法師をわざわざ踏みにじって通るような、意地の悪い通行人もなかった。

宇田川町を行きぬけて、柴井町へ踏み込んだときである。どこかの屋根の上で鴉からすの鳴く声がきこえた。

「あら、鴉が……。」と、おせきは声のする方を見かえった。

「月夜鴉だよ。」

要次郎がこう言った途端に、二匹の犬がそこらの路地から駈け出して来て、あたかもおせきの影の上で狂いまわった。はつと思つておせきが身をよけると、犬はそれを追うように駈けあいて、かれの影を踏みながら狂っている。おせきは身をふるわせて要次

郎に取り縋すがった。

「おまえさん、早く追つて……。」

「畜生。叱しつ、叱しつ。」

犬は要次郎に追われながらも、やはりおせきに付きまどつてい  
るように、かれの影を踏みながら跳り狂つているので、要次郎も  
癩かん癩しやくをおこして、足もとの小石を拾つて、二、三度叩たたきつけ  
ると、二匹の犬は悲鳴をあげて逃げ去つた。

おせきは無事に自分の家へ送りとどけられたが、その晩の夢に  
は、二匹の犬がかれの枕もとで駈けまわるのを見た。

今まで、おせきは月夜を恐れていたのであるが、その後のおせきは、昼の日光をも恐れるようになった。日光のかがやくところへ出れば、自分の影が地に映る。それを何者にか踏まれるのが怖ろしいので、かれは明かるい日に表へ出るのを嫌った。暗い夜を好み、暗い日を好み、家内でも薄暗いところを好むようになる、当然の結果としてかれは陰鬱いんうつな人間となった。

それが嵩こじて、あくる年の三月頃になると、かれは燈火あかりをも嫌うようになった。月といわず、日といわず、燈火といわず、すべて自分の影をうつすものを嫌うのである。かれは自分の影を見ることを恐れた。かれは針仕事の稽古にも通わなくなつた。

「おせきにも困ったものですね。」と、その事情を知っている母は、ときどきに顔をしかめて夫にささやくこともあった。

「まったく困った奴だ。」

弥助も溜め息をつくばかりで、どうにも仕様がなかった。

「やっぱり一つの病気ですね。」と、お由は言った。

「まあそうだな。」

それが大野屋の人々にもきこえて、伯母夫婦も心配した。とりわけて要次郎は気を痛めた。ことに二度目のときには自分が一緒に連れ立っていただけに、彼は一種の責任があるようにも感じられた。

「おまえがそばに付いていながら、なぜ早くその犬を追ってしま



わないのだねえ。」と、要次郎は自分の母からも叱られた。

おせきが初めて自分の影を踏まれたのは九月の十三夜である。それからもう半年以上を過ぎて、おせきは十八、要次郎は二十歳はたちの春を迎えている。前々からの約束で、ことしはもう婿入りの相談をきめることになっているのであるが、かんじん肝腎の婿取り娘が半気ちがいのような、半病人のような形になっているので、それもまずそのままになっているのを、おせきの親たちは勿論、伯母夫婦もしきりに心配していたのであるが、ただ一と通りの意見や説諭ぐらいでは、どうしてもおせきの病をなおすことは出来なかつた。

なにしろこれは一種の病気であると認めて、近江屋でも嫌がる

本人を連れ出して、二、三人の医者に診<sup>み</sup>てもらったのであるが、どこの医者にも確かな診断をくだすことは出来ないで、おそらく年ごろの娘にあり勝<sup>がち</sup>の氣鬱病であろうかなどというに過ぎなかつた。そのうちに大野屋の総領息子、すなわち要次郎の兄が或る人から下谷に偉い行<sup>ぎようじゃ</sup>者があるということを知りて来たが、要次郎はそれを信じなかつた。

「それは狐使いだということだ。あんな奴に祈<sup>きとう</sup>禱を頼むと、かえつて狐を憑<sup>つ</sup>けられる。」

「いや、その行者はそんなのではない。大抵の氣ちがいでも一度祈禱をしてもらえば癒るそうだ。」

兄弟がしきりに言い争っているのが母の耳にもはいったので、

ともかくもそれを近江屋の親たちに話して聞かせると、迷い悩んでいる弥助夫婦は非常によろこんだ。しかしすぐに娘を連れて行くといつても、きつと嫌がるに相違ないと思つたので、夫婦だけがまずその行者をたずねて、彼の意見を一応きいて来ることにした。それは嘉永二年六月のはじめで、ことしの梅雨つゆのまだ明け切らない暗い日であつた。

行者の家は五条の天神の裏通りで、表構えはさほど広くもないが、奥行きのみどく深い家であるので、この頃の雨の日には一層うす暗く感じられた。何の神か知らないが、それを祭つてある奥の間には二本の蠟燭ろうそくがともっていた。行者は六十以上かとも見える老人で、弥助夫婦からその娘のことをくわしく聞いた後に、

彼はしばらく眼をとじて考えていた。

「自分で自分の影を恐れる……それは不思議のことでござる。では、ともかくもこの蠟燭をあげる。これを持ってお帰りなさるがよい。」

行者は神前にかがやいている蠟燭の一本をとって出した。今夜の子ねの刻（午後十二時）にその蠟燭の火を照らして、壁かまたは障子にうつし出される娘の影を見とどけるといのである。娘に何かの憑き物がしているならば、その形は見えずともその影がありと映るはずである。その娘に狐が憑いているならば、狐の影がうつるに相違ない。鬼が憑いているならば鬼が映る。それを見とどけて報告してくれば、わたしの方にもまた相当の考えが

あるというのであつた。かれはその蠟燭を小さい白木の箱に入れて、なにか呪文のようなことを唱えた上で、うやうやしく弥助にわたした。

「ありがとうございます。」

夫婦は押し頂いて帰つて来た。その日は夕方から雨が強くなつて、ときどきに雷らいの音がきこえた。これで梅雨も明けるのであるうと思つたが、今夜の弥助夫婦にとっては、雨の音、雷の音、それがなんとなく物すさまじいようにも感じられた。

前から話しておいては面倒だと思つたので、夫婦は娘にむかつて何事も洩もらさなかつた。四つ（午後十時）には店を閉めることになつていたので、今夜もいつもの通りにして家内の者を寝かせ

た。おせきは二階の三畳に寝た。胸に一物いちもつある夫婦は寝たふりをして夜のふけるのを待っていると、やがて子の刻の鐘がひびいた。それを合図に夫婦はそつと階段をのぼった。弥助はかの蠟燭を持っていた。

二階の三畳の襖をあけてうかがうと、今夜のおせきは疲れたようにすやすやと眠っていた。お由はしずかに揺り起こして、半分は寝ぼけているような若い娘を寢床の上に起き直らせると、かれの黒い影は一方の鼠壁に細く揺れて映った。蠟燭を差し出す父の手がすこしく顫ふるえているからであつた。

夫婦は恐るるように壁を見つめると、それに映っているのは確かに娘の影であつた。そこには角のある鬼や、口の尖とがっている狐

などの影は決して見られなかった。

#### 四

夫婦は安心したようにまずほつとした。不思議そうにきよろきよろしている娘を再びそつと寝かせて、ふたりは抜き足をして二階を降りて来た。

あくる日は弥助ひとりで再び下谷の行者をたずねると、老いたる行者はまた考えていた。

「それでは私にも祈祷の仕様がなない。」  
突き放されて、弥助も途方にくれた。

「では、どうしても御祈祷は願われますまいか。」と、彼は嘆くように言った。

「お気の毒だが、わたしの力には及ばない。しかし、折角たびたびお出でになったのであるから、もう一度ためして御覧になるがよい。」と、行者はさらに一本の蠟燭を渡した。「今夜すぐはこの火を燃やすのではない。今から数えて百日目の夜、時刻はやはり子の刻、お忘れなさるな。」

今から百日というのでは、あまりに先きが長いとも思ったが、弥助はこの行者の前でわがままを言うほどの勇氣はなかった。かれは教えられたままに一本の蠟燭を頂いて帰った。

こういう事情であるから、おせきの婿取りも当然延期されるこ



とになった。あんな行者などを信仰するのは間違っていると、要次郎は蔭でしきりに憤慨していたが、周囲の力に圧せられて、かれはおめおめそれに服従するのほかはなかった。

「夏のうちにどこかの滝にでも打たせたらよかろう。」と、要次郎は言った。彼は近江屋の夫婦を説いて、王子か目黒の滝へおせきを連れ出そうと企てたが、両親はともかくも、本人のおせきが外出を堅く拒むこぼので、それも結局実行されなかった。

ことしの夏の暑さは格別で、おせきの夏痩せは著しく眼に立った。日の目を見ないような奥の間にばかり閉じこもっているために、運動不足、それに伴う食欲不振がいよいよかれを疲らせて、さながら生きている幽霊のようになり果てた。わけを知らない人

は癩ろうしよう症うわざであろうなどとも噂うわさしていた。そのあいだに夏も過ぎ、秋が来て、旧暦では秋の終りという九月になった。行者に教えられた百日目は九月十二日に相当するのであった。

それは初めて知ったわけではない。行者に教えられた時、弥助夫婦はすぐにその日を繰ってみて、それが十三夜の前日に当たることをあらかじめ知っていたのである。おせきが初めて影を踏まれたのは去年の十三夜の前夜で、行者のいう百日目があたかも満一年目の当日であるということが、かれの父母の胸に一種の暗い影を投げた。今度こそはその蠟燭のひかりが何かの不思議を照らし出すのではないかとも危ぶまれて、夫婦は一面に言い知れない不安をいだきながらも、いわゆる怖いもの見たさの好奇心も手伝

つて、その日の早く来るのを待ちわびていた。

その九月十二日がいよいよ来た。その夜の月は去年と同じように明かるかった。

あくる十三日、きょうも朝から晴れていた。ひる少し前に弱い地震があった。八つ頃（午後二時）に大野屋の伯母が近所まで来たといつて、近江屋の店に立ち寄った。呼ばれて、おせきは奥から出て来て、伯母にもひと通りの挨拶をした。伯母が帰るときに、お由は表まで送つて出て、往来で小声でささやいた。

「おせきの百日目というのは昨夜ゆうべだったのですよ。」

「そう思ったからわたしも様子を見に来たのさ。」と、伯母も声をひそめた。「そこで、何か変わったことでもあつて……。」

「それがね、姉さん。」と、お由はうしろを見かえりながら摺り寄った。「ゆうべも九つ（午後十二時）を合図におせきの寢床へ忍んで行って、寝ぼけてぼんやりしているのを抱き起して、うちの方が蠟燭をかざしてみると……壁には骸骨がいこつの影が映って……」

お由の声は顫えていた。伯母も顔の色を変えた。

「え、骸骨の影が……。見違いじゃあるまいね。」

「あんまり不思議ですからよく見つめていたんですけれど、確かにそれが骸骨に相違ないので、わたしはだんだんに怖くなりました。わたしばかりでなく、うちの人の眼にも見えたというのですから、嘘うそじゃありません。」

「まあ。」と、伯母は溜め息をついた。「当人はそれを知らないのかえ。」

「ひどく眠がっていて、またすぐに寝てしまいましたから、なんにも知らないらしいのです。それにしても、骸骨が映るなんて一体どうしたんでしょう。」

「下谷へ行つて訊いてみたの。」と、伯母は訊いた。

「うちの人は下谷へ行つて、その話をしましたところが、行者さまはただ黙つて考えていて、わたしにもよく判らないと言つたそうです。」と、お由は声を曇らせた。「ほんとうに判らないのか、判つていても言わないのか、どっちでしょうね。」

「さあ。」

判っていても言わないのであろうと、伯母は想像した。お由もそう思っているらしかった。もしそうならば、それは悪いことに相違ない。善いことであれば隠すはずがないとは、誰でも考えられることである。二人の女は暗い顔を見合わせて、しばらく往来中に突っ立っていると、その頭の上の青空には白い雲が高く流れていた。

お由はやがて泣き出した。

「おせきは死ぬのでしうか。」

伯母もなんと答えていいか判らなかつた。かれも内心には十二分の恐れをいだきながら、ともかくも間にあわせの気休めを言うておくのほかはなかつた。

伯母は家へ帰ってその話をすると、要次郎はまた怒った。

「近江屋の叔父さんや叔母さんにも困るな。いつまで狐使いの行者なんかを信仰しているのだろう。そんなことをしてこつちをさ<sup>おど</sup>んざん嚇かしておいて、おしまいに高い祈祷料をせしめようとする魂胆に相違ないのだ。そのくらいの事が判らないのかな。」

「そんなことを言っても、論より証拠で、ちようど百日目の晩に怪しい影が映ったというじゃないか。」と、兄は言った。

「それは行者が狐を使うのだ。」

「またもや兄弟喧嘩がはじまったが、大野屋の両親にもその裁判が付かなかつた。」

行者を信じる兄も、行者を信じない弟も、しよせんは水かけ論

に過ぎないので、夕飯を境にしてその議論も自然物別れになつてしまつたが、要次郎の胸はまだ納まらなかつた。夕飯を食つてしまつて近所の銭湯へ行つて帰つてくると、今夜の月はあざやかに昇つていた。

「いい十三夜だ。」と、近所の人達も表に出た。中には手を合せて拝んでいるのもあつた。

十三夜——それを考えると、要次郎はなんだか家に落ちついていられなかつた。かれはふらふらと店を出て、柴井町の近江屋をたずねた。

「おせきちゃん、いますか。」

「はあ。奥にいますよ。」と、母のお由は答えた。



「呼んでくれませんか。」と、要次郎は言った。

「おせきや。要ちゃんが来ましたよ。」

母に呼ばれて、おせきは奥から出て来た。今夜のおせきはいつもよりも綺麗きれいに化粧しているのが、月のひかりの前にいつそう美しく見えた。

「月がいいから表へ拜みに出ませんか。」と、要次郎は誘った。

おそらく断わるかと思いのほか、おせきは素直に表へ出て来たので、両親も不思議に思った。要次郎もすこし案外に感じた。しかし彼はおせきを明かるい月の前にひき出して、その光りを恐れないような習慣を作らせようと決心して来たのであるから、それをちようど幸いにして、ふたりは連れ立って歩き出した。両親も

よろこんで出してやった。

若い男と女とは、金杉の方角にむかつて歩いて行くと、冷たい秋の夜風がふたりの袂たもとをそよそよと吹いた。月のひかりは昼のよう  
に明かるかった。

「おせきちちゃん。こういう月夜の晩にあるくのは、いい心持だろう。」と、要次郎は言った。

おせきは黙っていた。

「いつかの晩も言った通り、つまらないことを気にするからいけない。それだから気が鬱ふさいだり、からだが悪くなったりして、お父さんやお母さんも心配するようになるのだ。そんなことを忘れてしまうために、今夜は遅くなるまで歩こうじゃないか。」

「ええ。」と、おせきは低い声で答えた。

——影や道陸神、十三夜のぼた餅——

子供の唄がまた聞こえた。それは近江屋の店さきを離れてから一町ほども歩き出した頃であった。

「子供が来てもかまわない。平気で思うさま踏ませてやる方がいいよ。」と、要次郎は励ますように言った。

子供の群れは十人ばかりがひと組になって横町から出て来た。かれらは声をそろえて唄いながら二人のそばへ近寄ったが、要次郎は片手でおせきの右の手をしっかりと握りながら、わざと平気で歩いていると、その影を踏もうとして近寄ったらしい子供等は、なにを見たのか急にわつと言つて一度に逃げ散った。

「お化けだ、お化けだ。」

かれらは口々に叫びながら逃げた。影を踏もうとして近寄つても、こつちが平気でいるらしいので、さらにそんなことを言つて嚇したのであろうと思ひながら、要次郎は自分のうしろを見返ると、今までは南にむかっていたので一向に気が付かなかつたが、斜めにうしろの地面に落ちてゐる二つの影——その一つは確かに自分の影であつたが、他の一つは骸骨の影であつたので、要次郎もあつと驚いた。行者を狐つかいなどと罵つていながらも、今やその影を実地に見せられて、彼はにわかには言ひ知れない恐怖に襲われた。子供らがお化けだと叫んだのも嘘ではなかつた。

要次郎は不意の恐れに前後の考えをうしなつて、今までしつか

りと握りしめていたおせきの手を振り放して、半分は夢中で柴井町の方へ引つ返して逃げた。

その注進に驚かされて、おせきの両親は要次郎と一緒にそこへ駈けつけてみると、おせきは右の肩から袈裟けさぎ斬りに斬られて往来のまん中に倒れていた。

近所の人の話によると、要次郎が駈け出したあとへ一人の侍が通りかかって、いきなり刀をぬいておせきを斬り倒して立ち去ったというのであった。宵の口といい、この月夜に辻斬りでもあるまい。かの侍も地にうつる怪しい影をみて、たちまちに斬り倒してしまったのかも知れない。

おせきが自分の影を恐れていたのは、こういうことになる前兆

であつたかと、近江屋の親たちは嘆いた。行者の奴が狐をつけてこんな不思議を見せたのだと、要次郎は憤つた。しかし誰にも確かな説明の出来るはずはなかつた。ただこんな奇怪な出来事があつたとして、世間に伝えられたに過ぎなかつた。

# 青空文庫情報

底本：「岡本綺堂 怪談選集」小学館文庫、小学館

2009（平成21）年7月12日初版第1刷発行

初出：「講談倶楽部」

1925（大正14）年9月

※「子供」と「子ども」の混在は、底本通りです。

※表題は底本では、「影《かげ》を踏《ふ》まれた女《おんな》」  
となっています。

※誤植を疑った箇所を、「近代異妖篇（綺堂読物集乃三）」春陽  
堂、1926（大正15）年10月25日発行の表記にそって、あらためま

した。

入力：江村秀之

校正：岡村和彦

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 影を踏まれた女

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>